

平成30年11月7日(水)

冬の使者

雪虫をご存じだろうか。

雪虫＝晩秋に道路や町中の家の軒下などをふわーと静かに飛ぶ白い小虫の北国での方言。雪のようだとも、この虫が飛ぶとやがて雪になるともいい伝えられている。東京では〈オオワタ〉とか〈シーラッコ〉と呼び、京都では〈白子屋お駒はん〉、大和その他で〈シロコババ〉、伊勢で〈オナツコジョロ〉、伊豆で〈シロバンバ〉などの方言で呼ばれ、子どもたちがこの虫を追いかけて遊んだ。アブラムシ類の中に白蠟物質を分泌する腺が多数あって、多く分泌されると体全体が白い綿で包まれたようになる種類がいる。秋の寄主植物を離れて移住飛翔(ひしよう)の際に目だちやすいので、江戸時代以降子どもの遊びの対象となった。

シロバンバは、小説の題名にもなっているので、聞いたことがあるのではないかな。

寒い冬枯れの日、常磐線の踏切の近くで、帰り道を急ぎながら、ランドセルを揺らしていると、白い虫が雪のように群れ飛んでいた。

「わたばっぱ」だ。と友人が叫んだ。

「あしたはゆきがもしんね」と誰かが言った。

雪は、あまり降らなかったが、降ると積もるほどになる時もあった。いまより、体感気温はかなり寒かったのではないかな。冬はこたつで丸くなるのが毎日だった。

雪虫という名は、その後、大学に行くころになって初めて認識した。ああ、子供のころに見たあの虫のことだなあと感じたことがある。

小春日和をインディアンサマーと呼ぶのも、高校生になってから知ったことである。

英語や、地学や地理や世界史・日本史、古文に漢文、数学や化学を含めて、様々な知識と出会い、様々な雑学とも出会うのが高校時代であった。

小説や映画、様々な学生服やファッション、時計、かばん、ジーンズ、靴下や下着、ラジオやステレオ等の器具、音楽や美術まで、身に着けるものと生活の諸様式に目覚めていく時代である。

病気の種類や、車やバイク、東京の地下鉄やJR列車の種類、山や絵画、ギターや切手など趣味も多彩を極めていく。

「片一方でない情報が必要だ。」「バランス感覚を身に着きたい。」「あふれるほどの知識を持ちたい。」と心から念願した。かなったこととかなわなかった

ことがあった。その象徴が雪虫のような気がしてならない。

襟元を閉じ雪虫が飛ぶ夕日 逆熊